



ユーラシア文化館の展示室にて

国後進学した上智大学では、日本文化を和英バイリンガルで研究できる比較文化化学科で美術史を専攻した。修士課程修了後は博士課程まで進むことを決心し、渡米。ハーヴァード大学大学院博士課程で東洋美術史を専攻し、主に仏教美術の研究を行った。在学二年目からはTeaching Fellowとして学部生を教え、キュレーターとしての専門的なOJTもハーヴァード大学附属美術館で受けた。

ハーヴァードでは徹底したProfessionalismを学んだ。研究者として専門領域を探究しながら学生を指導し、一般客を対象とした美術展や講演も企画する。美術史家が望むすべての役割がそこには凝縮されており、その根幹をなすのは個人の資質であった。

### ◆今、キュレーターとして

ACでの貴重な経験が全てプラスに働き、今現在に至るといっても過言ではない。ア

メリカから帰国した後は美術史家として教鞭をとり、二〇〇一年にはキュレーターとして横浜市のミュージアム「横浜ユーラシア文化館」の立ち上げにゼロからかわることができた。コンセプトは「ユーラシア大陸で練り広げられた文化交流の証」。ヨーロッパとアジアを一続きの世界Eurasiaとして、諸文化を紹介するのが使命である。キュレーターは、躯体の建築から内装のデザイン、展示、原稿執筆、シヨップやイベントの計画と、全てに自分の目を引き届かせる責任がある。ここでも妥協を許さず、さまざまな業種のprofessionalismが触発しあって新しいミュージアムを完成させた。先日職場に、ACでは鬼のように怖かった寮長のMr. Williamsから気さくなemailが届いた。彼の購入した陶器を鑑定してほしいという。自分の成長が認められたようで嬉しかった。

### ◆UWCの力

多様な文化を生きる生身の青年たちと生活できることはUWCならではの貴重な経験である。UWC日本協会やスポンサー企業の方々には心から感謝の意を表したい。機械翻訳が可能になった今、英語ができるだけではつまらない。自分ならではの個性と魅力を具えた日本人が一人でも多くUWCに育まれ、グローバルに活躍してほしいと願う。

(注) <http://www.eurasia.city.yokohama.jp/>

# 経済広報

2008年4月号  
定価315円(税込)

発行

経済広報センター  
TEL:03-3201-1412 FAX:03-3201-1404  
E-mail:keizaikoho@kcc.or.jp

特集  
経営者と広報

## 記者対応の十戒～経営者が考える広報～

日立製作所 取締役 代表執行役執行役社長 古川一夫

## 経営者の執務時間の5%は広報に

東レ 広報室長 前田一郎

## 経営者に求められるコミュニケーション力とは

コミュニケーション・コンサルタント 川村秀樹

## “トップ広報”事例研究

経済広報センター事務局

## 経済部長に聞く

読売新聞東京本社 経済部長  
大橋善光

# ミュージアムで異文化交流を演出

一九七五年UWCアトランティック・カレッジ(A/C)卒。八〇年上智大学外国語学部比較文化学科卒。八五年同大学大学院修士課程修了。九〇年ハーヴァード大学大学院博士課程後期単位取得(Dr. D. Candidate)。八六年—二〇〇一年美術史家として上智・早稲田・実践女子大学で非常勤講師。二〇〇一年九月から横浜ユーラシア文化館のキュレーターを務める。

横浜ユーラシア文化館

キュレーター

福原庸子

ふくはら やすこ

## 🌟ピンチを極上のチャンスに

世界中から生徒が集まるアトランティック・カレッジ(A/C)への留学は、英語が好まなかった私にとって夢の実現であった。ところがA/C生活が始まると、得意であったはずの自分の英語力が幼稚すぎ、少なくとも発音には自信があったのだが、聞き慣れていた米語を話すのは少数のアメリカ人のみ。物怖じしていると、訛りや文法など全く気にしない各国の生徒がまわって来てくれる。授業で白熱した議論が展開されても到底追いつけない。少しは聞き取れるようになってからも(その頃には親友のヨークシャー訛りがうつつっていたが)、発音のチャンスがつかめない。猛勉強してレポートを提出しても「友達の丸写し」と教師に誤解されたこともあった。相手の意見を理解し即座に問題点を指摘するような

critical thinkingの訓練は全く受けていない日本人高校生にとって、欧米式の授業は辛かった。当時は、英語を不得意とする生徒に対する補修授業やカウンセリングもなかった。語学力以前の問題もあった。私は自分の国に関する客観的な知識が不足していたため、友人たちのお国自慢が始まって参加できない。日本文化紹介とはいっても浴衣を着て日本食を振る舞うことしかできなかつた。そんなことが数カ月は続いたと思う。やがて友人も増え、ゆとりが出てきた頃、「ヤスコは人形のような」と噂されているのを耳にして、これはほめ言葉ではないと危機感を覚えた。悔しい思いをどうにか消化して二年生になると、英語は話せて当然、自分の考えをしっかりと持った魅力的な人になりたいと積極的になっていった。A/Cの敷地から外に出て地域交流ができたことも大きな収穫であった。日本では未

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四一七名の卒業生を輩出している。

経験だった社会奉仕活動で出会ったウェールズの人たちに、心が揺さぶられたことを思い出す。ある障害者施設を訪れると、下半身麻痺という重度の障害を持つ小さな男の子が、私に水泳を習いたいという。呆然と立ち尽くす私に、「沈まないように足を支えて」と逆に教えられた。無邪気で驚くほど前向きな姿勢は、私がそれまで感じていた障害者に対する遠慮や偏見を一気に吹き飛ばした。美しい自然に囲まれ、古い石造りのコテージに一人暮らしをしているおばあさまMrs. Chattertonは、定期的に訪問する私を自分の孫のように愛し、温かいミルクティーと楽しいお喋りでもてなしてくれた。障害の有無や年齢に関係なく、互いにさりげなく助け合いながら生きていきたいと、毎回優しい気持ちに包まれて家路に着いた。

## 🌟帰国後、上智大学 そしてハーヴァードへ

A/Cでもどかしい思いや素晴らしい出会いが、確かにその後の人生で自分を成長させたという大きな原動力になった。帰